

北海道衣生活文化史の調査研究

— 歌棄田佐藤家所蔵衣服の調査報告 —

福 山 和 子

はじめに

北海道に、歴史的な衣服がどこに、どのような衣服が、どのような形で保存されているかを調査し記録しておかなければ、博物館等の施設以外のものはほとんどなくなろうとしている。

農、漁民の衣服はその形を記憶している方々もおり、それらの経験者により復元が可能である。しかし、武家文化の衣服は、その構成者が生存せず、また、その素材がすでに織られていないのが実情で、その復元が困難になっている。

故に今ある衣服の一つ一つを計測し、構成方法、素材を記録し、整理しておかなければ衣服文化の伝達はとぎれてしまうのである。

今回の調査はニシン漁にたづさわった漁師の衣生活の調査の途中で磯谷地区最後の運上屋であった田(かくじゅう)佐藤家に所蔵されている衣服数点について計測調査を行った。民間に歴史的な衣服が所蔵されているのはほとんどなく資料保存のためにもここに報告する。

この調査は「北海道の衣生活を研究する会」代表芦野トシ(北海道実業和裁専門学校)、永田志津子(静修短期大学)、谷内真佐子(北海道文化服装学院)と共に、「北の生活文化振興事業」(北海道)より調査補助を受け全道的に調査したものの一部である。

田佐藤家について

所在地：寿都郡寿都町字歌棄町有戸
佐藤 シゲ

歌棄・磯谷両場所の請負人になった最後の運上屋が田(かくじゅう)榊屋佐藤家である。初代定右衛門は寛政12年陸奥国に生れ、文政11年に渡道し福山町で衣料品販売店の榊屋を開いた。同時に白尻や撥法華で鰯場の請負人となり、箱

館では海産商を営んだ。嘉永5年(1853)歌棄、磯谷両場所の請負人となった。彼は場所の経営に専念すると同時に海産物製造に積極的に取り組むとともに「エトロフ」の漁場開発を行う等業績を上げた。一方、黒松内—歌棄潮路間、磯谷場所から岩内場所までの陸路の山道を開鑿して幕府から感謝をうけている。この地方開発の功績の第一人者である。明治2年場所請負制度廃止後も同地で漁業を営み有数の漁家として発展した。

現在の田佐藤家の住宅は明治20年代に創建、1968年(昭和43年)3月北海道有形文化財に指定されている。以上、寿都町史より抜粋した。

同家所蔵衣服調査内容

同家所蔵の衣服には次の物があつた。

- | | | |
|---------|------|----|
| 1. 火事装束 | 火事羽織 | 1点 |
| | 腹当 | 1点 |
| | 兜頭巾 | 1点 |
| 2. 陣羽織 | | 3点 |
| 3. 筒袖羽織 | | 1点 |
| 4. 野袴 | | 1点 |
| 5. 肩衣 | | 1点 |

今報告では、上記中、火事装束、陣羽織、筒袖羽織について計測調査結果を記す。

1. 火事羽織(写真1, 2)

火事羽織の構成寸法は図1の通りである。

外観は、木綿製の一つ紋で背の下部を割っている。家紋は佐藤家家紋「源氏車」が縫い止めである。

袖はもじり袖で、後つけ線に6.8cmの明がある。

縫製は、総裏がつき縫製上特別な点はみられない。

裾、袖口、背の明き部分に絹物1cm幅の組物

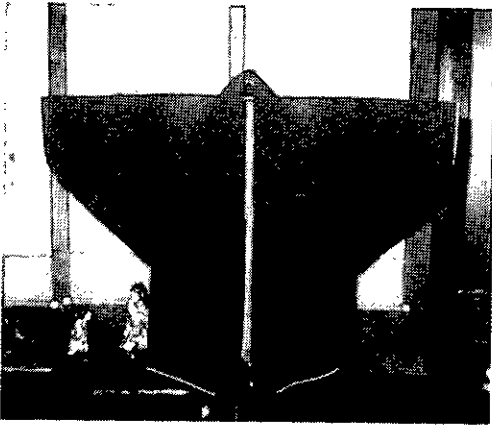


写真1 火事羽織 (前)

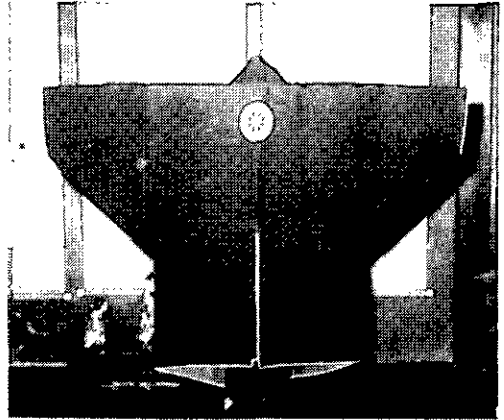
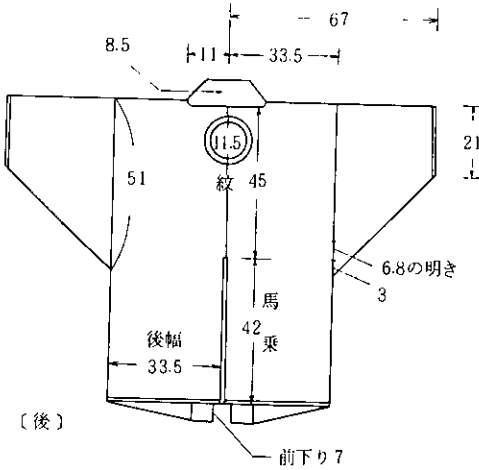
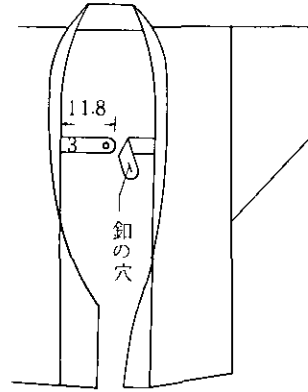
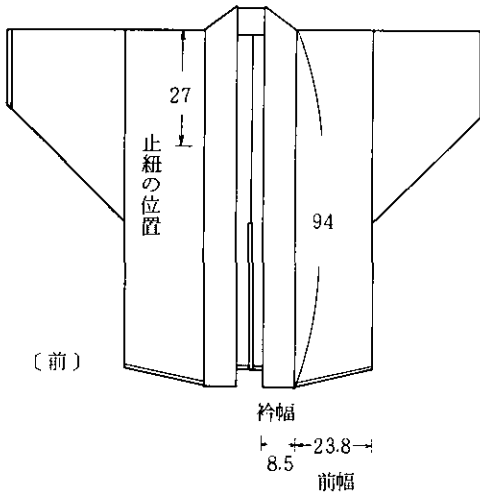


写真2 火事羽織 (後)

胸止めの位置



源氏中

図1 火事羽織の構成寸法

のテープ状の組紐で身頃の端の裁切の部分を作るみ覆輪仕立になっている。この組紐のつけ方は表より中表に縫い、この組紐を表にかえして裏身頃側で星どめ状の返し縫いで止めている。

胸止めの方法は釦止めで、釦穴は穴かがりがほどこしてある。

2. 腹 当 (写真3)

腹当の構成寸法は図2の通りである。後記の兜頭巾と腹当が、火事装束を象徴するもので、大きな図柄が特徴である。

中央部に家紋が縫いつけてあり、家紋の地布は絹の鬼縹縮緬の白と黒を写真の通りに用い、源氏車の構図線は黒の打紐を2本ならべてとめ図柄を表現している。

布は裏表共に木綿の呉呂覆輪を用い、腹当の外まわりはベージュ色の組紐で0.5cm幅に覆輪仕立されている。裏布は組物の上に0.2cmひかえられてつけられている。前衿ぐり部分は茶色の色違いの組紐で2列飾りがついている。

肩紐は筒紐状に縫われ、片方は止め用に乳型に折られ輪がつくられ、一方は紐になっている。この紐を表布と裏布

の間にはめ込み、裏側よりまつり止めてある。表側からは水色の打紐で飾止めがつけられている。腰部には止め紐がつけられている。紐の先に

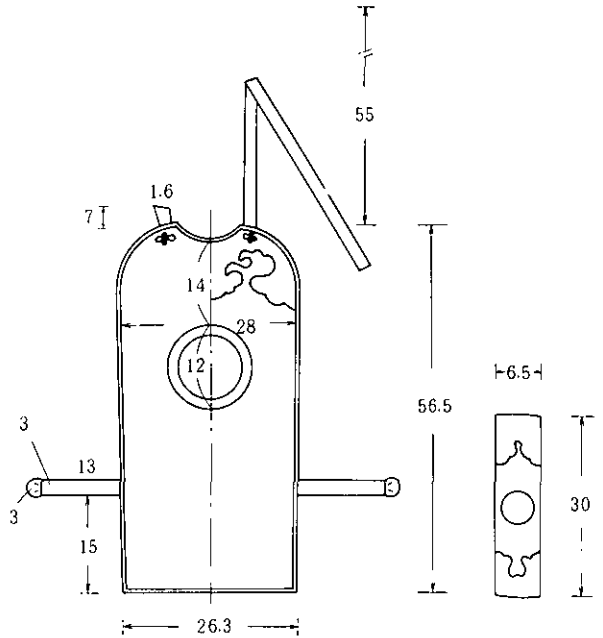


図2 腹当の構成寸法



写真3 腹 当

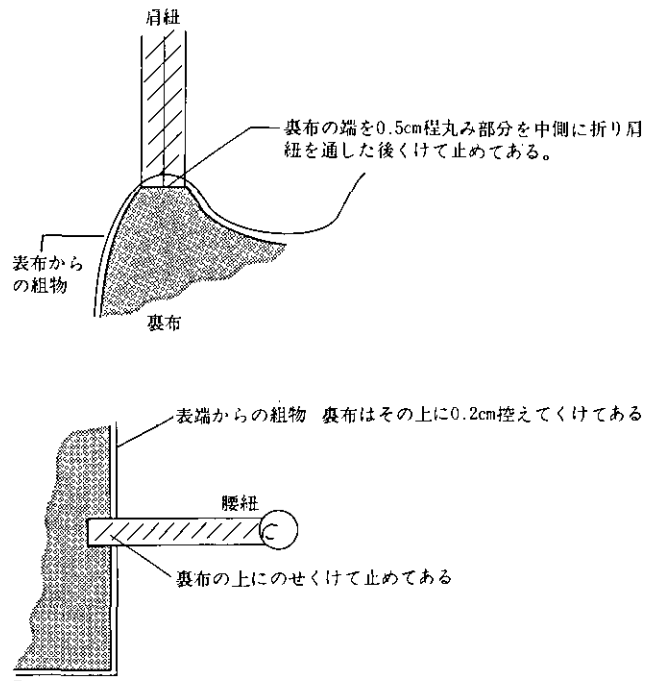


図3 紐のつけ方

は綿をつめた球状のものがつけられている。この部分は球状の部分の布端を紐の端に押し込みまつりとめてある。紐の一方の端は腹当の裏に3cm程のせくけ縫いで止めてある。(図3)

2.7cm幅のひもが革部の上に乗せられ、革部に千鳥ぐけで止められている。写真5の紐は後中

3. 兜頭巾 (写真4, 5)

兜頭巾の構成寸法は図4の通りである。

兜部分は革でつくられ、金泊がほどこされている。前頭部の装飾は黒革に0.3cm幅の金泊で縁取りされている。頭部の裾の前部は茶色の絹布で革の端をつつみ、横及び後は白絹

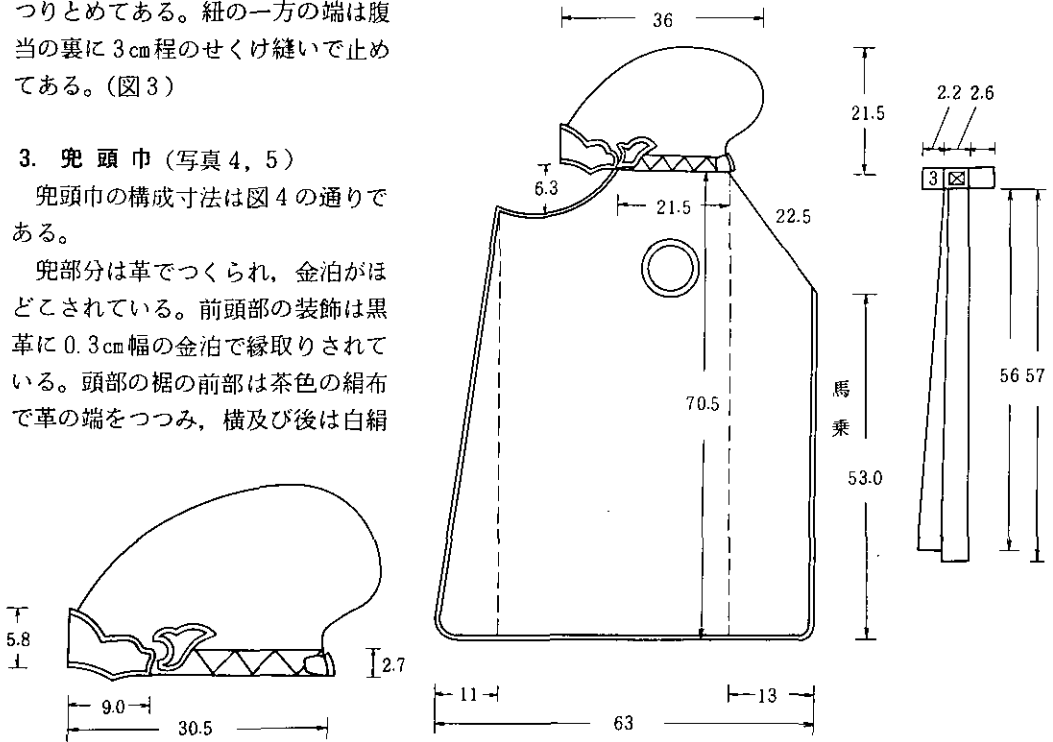


図4 兜頭巾構成寸法



写真4 兜頭巾(前)

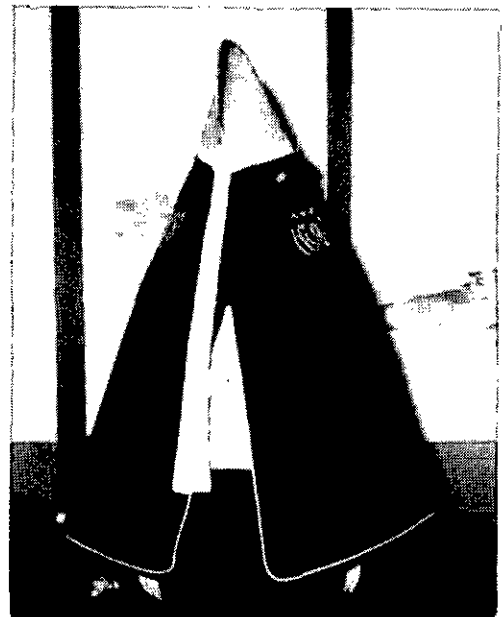


写真5 兜頭巾(後)

央で止まり、更に別布で飾り紐が中央部のみ止められている。

頭巾の布は表は羅紗、裏は雲龍紋様の絹が用いられている。

兜部分と頭巾部分のつけ方は革と頭巾の表布、裏布をそのまま合わせて中表に縫い、裏側でかがり止め、縫い代は頭巾側に片返しになっている。前部の縫いはじめは図6の通りになる。

頭巾の外廻りは絹の銀色の組物で0.4cm幅に覆輪されている。

止め具は金物のボタンと丸打紐で止めの輪とでかけるようになっている。右身頃の表に止め輪、頭巾の打合い先にボタンがつき(図5)、左身頃は裏に止め輪と右身頃と同様にボタンがついており、前の重ねはこの状態からは右前仕立になっている。

肩部にあたる所に家紋が細い打紐で線が構成され、それをかがり止めてつけられている。

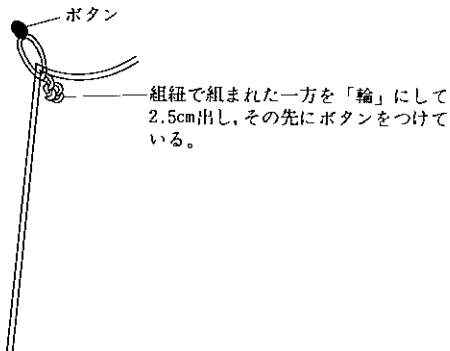


図5 ボタンのつけ方

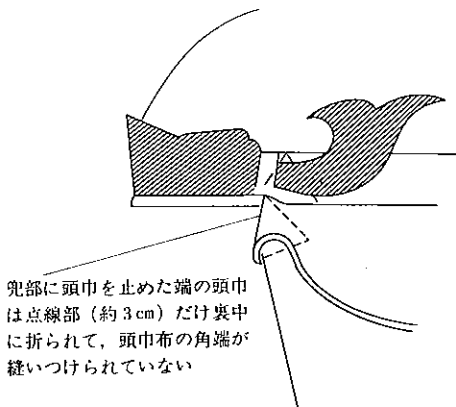


図6 頭巾の端の縫製

4. 陣羽織 その1 (写真6, 7, 8, 9)

陣羽織の構成寸法は図7の通りである。

材料は表布は錦、裏布は甲斐絹である。家紋はついていない。衿、裾、脇明部分の端の始末は黒絹組物で覆輪仕立されている。つけ方は表

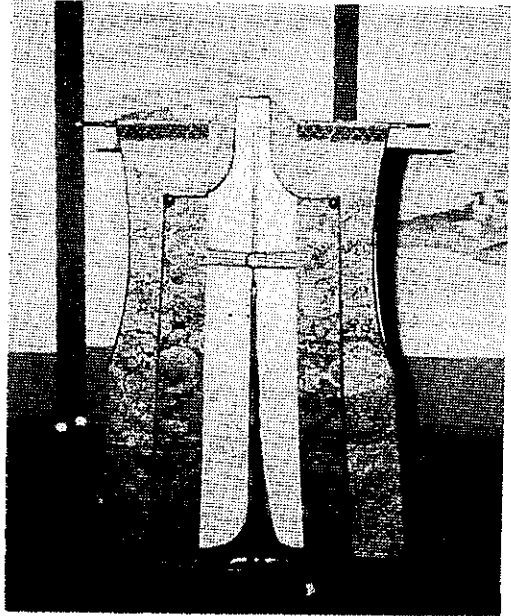


写真6 陣羽織—その1—(前)

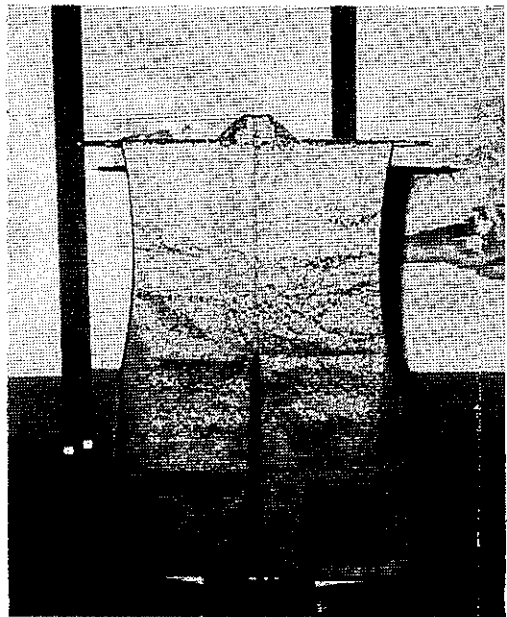


写真7 陣羽織—その1—(後)

布と中表に組物がおかれて縫われ、組物を裏側に返し星どめでとめてある。覆輪幅0.4~0.5cmで仕上げられている。太刀受け部分は写真9のように3.5cm幅のベルト状のものがのせられ止められている。黒い無地の両側を朱色の絹と下衿と共布で細い二列のトリミング(縁どり)がほどこされ、黒い部分には緑色で飾り千鳥掛がほどこされている。下衿部分は別柄の錦織が使われ上部端は写真8のようにボタンでおさえられている。前明きの止めは写真にあるよう、2cm

大のボタン止めになっている。

構成方法は表身頃と下衿の裏は「わ」でつづけて裁断され、表衿が上に乗るような状態でつけられていることから、覆輪が上衿と下衿の接点からはじまり、下衿外廻り、裾、後明き馬乗り部分、そして反対側の裾、下衿の外廻りと続いて仕上げられていることから、下衿の表衿と裏身頃をつけ表身頃と裏身頃とを合わせて全部覆輪し、上衿をつける順序であろう。



写真8 釦止紐と下衿の止め

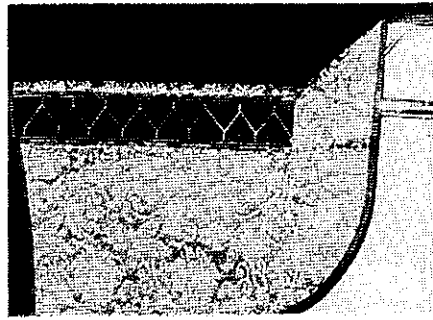


写真9 太刀受

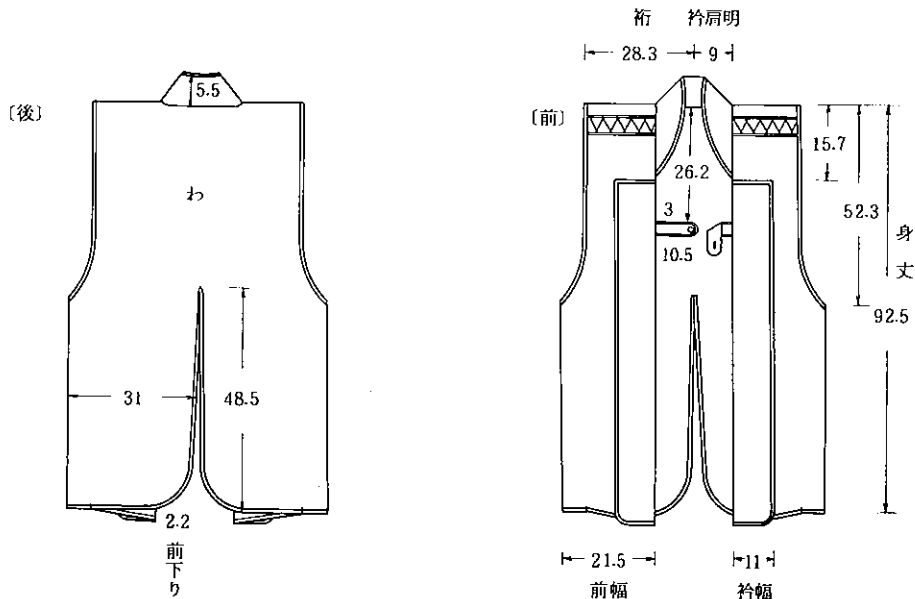


図7 陣羽織 その1の構成寸法

5. 陣羽織 その2 (写真10, 11)

この陣羽織の構成寸法は図8の通りである。材料は表布は赤の羅紗、裏は絹羽二重が使用

され、裏の背に蕨の紋が縫い止められている。衿、裾、脇明き部分の端は黒っぽい絹物の柄の組物で覆輪仕立されている。仕上幅は0.4~

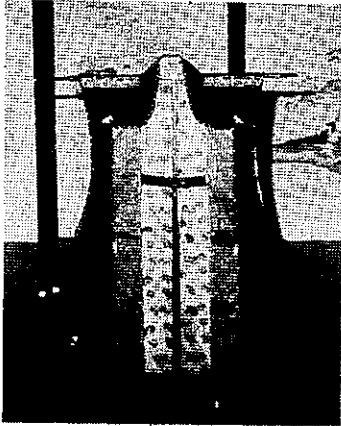


写真10 陣羽織—その2— (前)

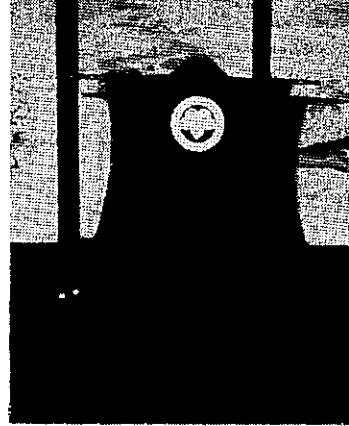


写真11 陣羽織—その2— (後)

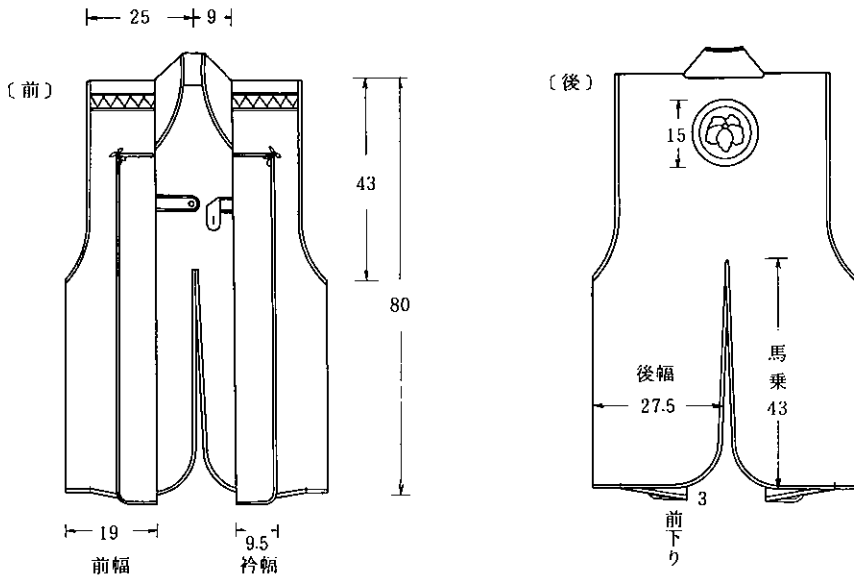


図8 陣羽織 その2の構成寸法

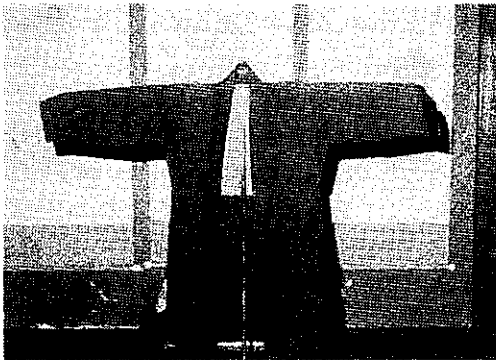


写真12 筒袖羽織 (前)

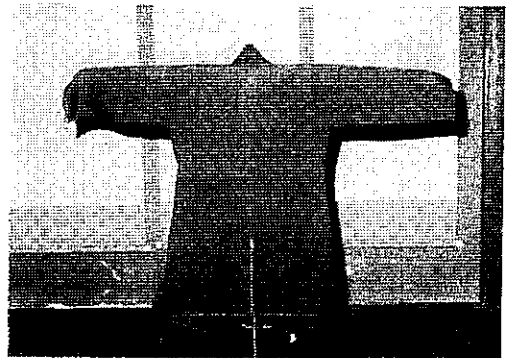


写真13 筒袖羽織 (後)

0.5 cmである。

太刀受部分はベージュ色（茶色の変色したものと思われる）のベルト状の上に同色で千鳥掛状に飾り縫いされている。

下衿上部端の止めは、身頃とボタンで止められている。身頃に組紐で結び組まれた先に1.5 cm大のボタンがつき、下衿の方にも組紐で結び組まれた「わ」がつけられ、その「わ」でボタンを止めるようになっている。

下衿表は錦織が用いられている。

構成の順序は前記「その1—陣羽織」と同様である。

尚、陣羽織「その3」の報告は「その2」と構成寸法は少々異なるが構成方法が同じなので紙面の都合もあり省略する。

6. 筒袖羽織（写真12, 13）

構成寸法は図9の通りである。

型は前は羽織型、後及び袖は洋服コート型で構成に和洋服の接点が見られる。背裾に短い明きがある。

材料は表布・裏布共に木綿を用いている。

縫製上の特徴は肩すべり、袖裏がついている。後身頃の裏布の裁断は表身頃の型と同じに裁ち、裏布、表布は別々に縫われ縫い代は脇側に片返ししてある。

脇縫いは裏布、表布ともに合わせ袋縫いしている。

袖口、裾まわりは絹物の組物で覆輪仕立になっている。前明きの止め紐は火事羽織と同様にボタン止めになっている。

考察とまとめ—今後の調査のために

これらの衣服は松前藩主よりの拝領品であると同家に伝えられている。しかし、いつ、何の理由で拝領された物か定かではない。前記したが、同家は漁場開発、道路開鑿して幕府から感謝され、賞詞をえていること、嘉永4年（1851）

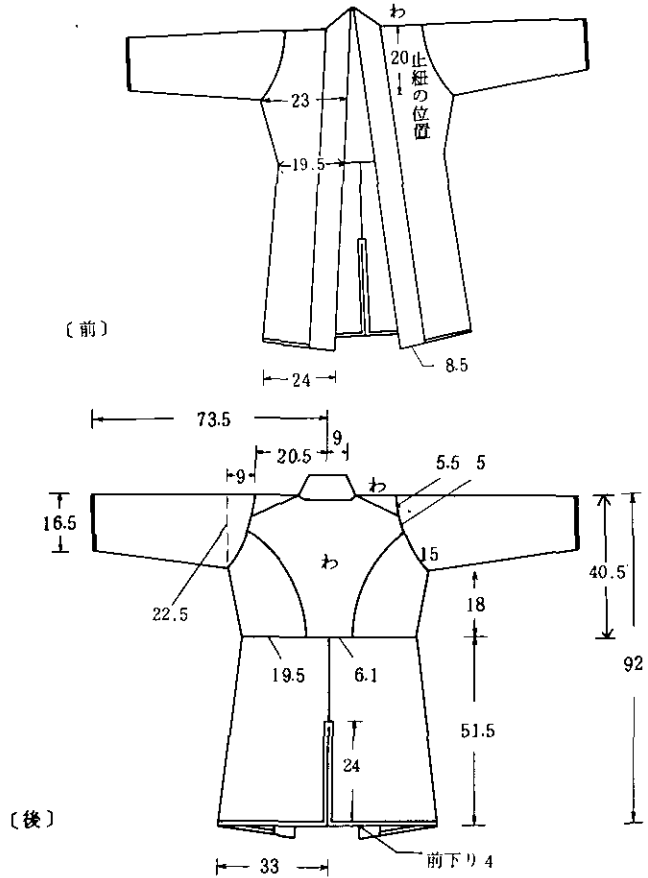


図9 筒袖羽織の構成寸法

福山城修築費として100両献金、また元治元年（1864）松前藩主崇広が海軍総奉行に任ぜられた時300両、さらに長州征伐の進発に際して400両などを献金していることから藩主より感謝の意で同家に拝領された品物であろう。同家にかかわる資料の一部より調査がすすんでいないので今後明らかにしたいところである。

また、ここへの記録をはぶいたが、野袴、肩衣が各1点ずつ所蔵されているが、この野袴は道中着として独立して扱われていたものか、火事装束の一部として扱われていたのか不明である。服飾史辞典等では火事装束には野袴を着用とあることから火事羽織と組み合わせられた可能性もある。同家の肩衣との組み合わせもあるが形式上、野袴と肩衣の組み合わせは考えられない。

次に近代日本服装史上、この調査で興味ある衣服は「筒袖羽織」である。江戸時代末期から明治期にかけて洋服化がすすむのであるが、この「筒袖羽織」がまさにその接点にある物と判断して良いであろう。和服の羽織からその型のままで袖のみ変形させたレキション羽織や筒袖羽織に移項し、次に前記したような前が和服の羽織の型をのこし、後が洋服コート型に裁断されている形になっている。

着装の状況を写真の種々の資料から判断すると、当初は軍服の上に羽織を着ていたものが、その羽織の袖の形が変形し、軍服の上に筒袖羽織になっていっていることが判明される。まさにその接点にある衣服であるのでこの衣服の流れについて調査をすすめる必要がある。尚、この筒袖羽織が火事羽織の一種として用いられていたかどうかについてはこの調査では不明である。

陣羽織については、この形式は脇マチがなく装飾もない最も簡素な物である。戦衣としての性格はみられず、一種の儀礼服化した江戸時代末期の製作と考えられる。北海道への陣羽織の流入はこのような松前藩からのもの、明治期になってから移住藩によって持込まれた物があり、それらは藩主所有の物から佐藤家に下渡された物のように商人の手に入る物、先住民族の手に渡った物がある。現在伊達藩所蔵だった陣羽織を調査しているが、その型に種々のものがあるので、流入の系譜と形について調査をつづける。

以上同家所蔵衣服から推察されることを記したが、今後、全道的調査によって問題点を解明したい。

この調査に当り、快よく御協力下さいました歌棄^田佐藤家の方々、札幌金丸吾舟家の方々、に誌面をもって御礼申し上げます。

また、調査方法等について御助言、御指導下さいました、北海道庁道民生活課主幹・畑宮清一郎様、寿都町教育委員会に、構成方法に特別の御指導下さいました芦野トシ氏に厚く御礼申し上げます。

参 考 図 書

- 寿都町史：寿都町教育委員会 昭和49年3月
 磯谷村史：齊藤常作編著 北海道共同印刷所 昭和56年9月
 北海道大百科辞典〈上〉：北海道新聞社 昭和56年8月
 北海道の歴史：榎本守恵 北海道新聞社 昭和57年8月
 日本洋服史：出口 稔 洋服業界記者クラブ 日本洋服史刊行委員会 昭和52年1月
 服装大百科辞典：被服文化協会 文化服装学院出版局 昭和44年3月